

書評誌『読書人』の国内思想戦

—— 1940年代前半日本の言論空間研究 (2) ——

植村和秀

はじめに

- 第1章 『読書人』創刊前夜の『東京堂月報』
- 第2章 1941年12月の『読書人』創刊と1942年の出版界の状況
- 第3章 創刊号と1942年前半の『読書人』(以上、第55巻第1号)
- 第4章 1942年後半の『読書人』
- 第5章 1943年前半の『読書人』(以上、本号)

第4章 1942年後半の『読書人』

1942年の後半から『読書人』の誌面の雰囲気は変わり始める。「良書」の読書論を編集の基軸とし、科学を重視してきた姿勢は、徐々に、「悪書」を弾劾し、信念を重視する方向に転じていくのである。

第2巻第7号の特集は、「12月8日以後の出版——批判と建設」である。冒頭には松本潤一郎の「最近の出版動向に関する二、三の覚え書」が掲載されている。日本出版協会文化局長であった松本は、専務理事の飯島幡司や事業局長の田中四郎と対立し、同号刊行の7月1日にはすでに辞職している。松本は、紛糾した6月13日の通常総会より前、10日に抗議の辞表を提出し、17日には受理されていた。(帆刈：104、162)ただし、松本を追悼する文集の年譜では7月辞任となっており、(松本：258)この論考の末尾にも文化局長と記されている。何か事務的な事情があったのかもしれない。

ここで松本は、1941年下半年に文協に申請された出版企画、書籍の販売部数、雑誌の販売部数すべてが大幅に増加し、「戦時下国民の文化に対する関心は益々熾烈さを加へ、文化内容の普及といふ出版活動本来の使命

が愈々有効に果されつつある欣ぶべき現象を觀取することが出来る」としている。(読書人 2-7:2) とりわけ、雑誌と国民生活の關係の深さが強調され、少なくとも「全国各世帯が毎月平均 2 冊は必ず購入するといふ勘定になる」と指摘するのである。(2-7:2)

このような量的活況を歓迎する一方、松本は、出版の質的傾向の検討も行っている。松本によれば、大東亜戦争以来の書籍や雑誌の企画は、一方では「イデオロギー的な面における日本精神の闡明強調」の傾向を示し、他方では「国民の時局的な関心を具体的な事象に集中リードせんとする意図」を示している。(2-7:2) 後者の主流は「南方關係の出版物」であり、「一般大衆層や青少年、児童等の比較的低い読者層」向けには、特に戦争の現地報告や兵器の解説が多い状況である。(2-7:2)

この傾向について松本は、「新しい自主的な世界觀」の樹立は正しいとしつつも、「反省なき序論的な見解のみが徒らに繰返され喧噪するさらひがないであらうか」と苦言を呈している。(2-7:3) さらに松本は、日本精神、南方關係ともに内容の浅い出版物が少なくないとして、「出版企画の任にある人が、あまりにも目先の時局現象に心を捉はれ目惑ひされて、拙速に趨るといふ風がありはしないか」と指摘する。(2-7:3) 文協は出版企画を審査して印刷用紙の配給を決定する組織であり、その常務理事として、松本は企画の安易さや粗雑さに警鐘を鳴らしたのである。

1941 年 9 月刊行の『東京堂月報』第 28 卷第 9 号で専務理事の飯島が強調したように、文協は、営利本位の出版を排し、良い出版物、必要な出版物に用紙を供給し、有害無益な出版物に用紙を供給しないことを重視していた。出版物の質的な改善を求める松本は、専門性と総合性を兼ね備えた「有機的組織」による出版の「最高度の能率」の実現と、それによる「高次の政治性と文化性」の獲得への期待をここで語っている。(2-7:3)

社会学者で法政大学教授であった松本は、なぜこれほどに熱意にあふれていたのであろうか。ご子息で元京都産業大学経済学部教授の松本達治によれば、高田保馬の推薦を受けて、法政大学教授は現職のまま「数年間を実社会のために働くという心組み」で就任したようである。(松本:73)

しかし、飯島や田中との対立によって、松本は辞任することとなる。法政大学で松本に教わった布川角左衛門は、田中を追慕する座談会のなかで、学究の松本と実業家の田中は「キャリアーの上でうまくいかないものがあつたと思う」とし、行動力のある田中が関西在住の飯島の代理も務め、結果として組織運営で突出してしまつたと嘆いている。(田中：98-99)

それとも関連して、松本には飯島や田中との思想的な対立もあつたのであろう。松本を支持した培風館の山本慶治は、1954年刊行の回想録で、「国家的経済的統制は別としても、我国に於ける所謂自由主義は我儘主義であり、個人主義は利己主義の代名詞であつたから、是等の誤つた思想及び精神を改造して、真の人的世界的な友愛と信義に富んだ真の文化を發揚することは、私としては最も愉快に思うことであつた」と記している。(山本：115) この立場から山本は、松本の良書出版の方針に賛同するとともに、出版者の大合同にまで踏み込むべきと考えて行動を起こしていた。(山本：132)

「[出版界の雑草を抜き取つて、良い草花を生い立たせる]とは、出版文化局長の松本博士が叱咤せられたことで、出版文化協会はその当初は、当局の指導の下に、所謂業者の盛り上げる力によって、即ち業者が自発的に、望ましい出版文化の昂上を期したようであつたが、そうした行き方では出版統制はなかなか所期の目的は達せられそうになかつた。一方戦時資材の供給は、出版用紙の需要を充たすことが、だんだん困難となつたので、後に來つた「出版企業整備」の声が次第に高められて來たのであつた」。(山本：131)

松本が商業主義を敵視していたことは、講談社の萱原宏一も指摘している。萱原によれば、講談社の竹中保一のメモに、1941年4月23日に松本が來社し、「コマーシャルイズムを清算せよと各誌に注文あり」との記録がある。(萱原：331) 萱原は、松本が「わざわざ來社して、社員を集めて講演した骨子も、商業主義を清算して貰いたいという一点であつた」とし、「出版業者中の新体制讚美論者の言うところも、おおむねそれであつた」と指摘している。(萱原：261)

萱原はまた、この頃、陸軍の鈴木庫三が講談社を商業主義であると執拗に弾劾していたと回想している。萱原は、根拠を示さない批判は「軍人、官僚の生硬な教条主義による、自己満足に過ぎない」とする一方、彼らの本音は、「小説や娯楽ものは不急不要であって、時局記事を満載せよということ」であったとする。「時局記事大いに結構だ、けれども彼らの要求通りに時局記事を満載して、読者が読んでくれるものであろうか?」、「読者に読んでもらうために、私どもは毎日苦労しているのである」と萱原は憤りを込めて回想している。(萱原：262)

なお、講談社では1941年2月12日に顧問制を導入していた。萱原は、3月4日に各誌編集長が貴賓室に集められ、前日に中佐に昇進した鈴木が同席して、顧問の氏名が発表されたと記している。(萱原：263) 顧問に就任したのは、国民精神文化研究所の伏見猛彌、志田延義、前田隆一、吉田三郎、陸軍省報道部の外郭団体である大東研究所の城戸元亮、大熊武雄、阿部仁三、平井正夫、加藤重雄、日本世紀社の花見達二、西谷弥兵衛、中河与一、神原孝夫であり、後に満田巖が加わって14名である。(佐藤：304-305、講談社：476) 魚住昭によれば、講談社社史作成時の竹中証言には、謝礼として伏見と国民精神文化研究所に毎月各1000円(後に減額)、城戸に1000円、花見に500円、阿部と西谷には300円を支出した等の記録がある。(魚住：383)

松本の講演日の午前中には、顧問による講談社の雑誌『現代』の批評会があったようである。(萱原：331) 『現代』の内容一新が鈴木を狙いであったと萱原は指摘するものの、(萱原：263) 佐藤卓己は、その論調に大きな変化は認められず、講談社は鈴木時代に空前の収益を上げ、『現代』は総合雑誌として終戦まで存続できたと指摘している。(佐藤：305)

さて、講談社の顧問のなかで、志田、前田、吉田、阿部、西谷、満田は『読書人』の執筆者である。出版企業の整理が強行され、雑誌の整理も強行されるなかで、『改造』や『文藝春秋』の総合雑誌からの除外、『改造』と『中央公論』の廃業の後も、『現代』は総合雑誌として存続した。『読書人』としても東京堂としても、講談社の動向に注目していたはずである。

松本に続く論考は、興亜院文化部長の松村 轟^{すすむ}による「出版界への冀望」である。松村は、米英の文化を「東洋の道義的観点」から批判し、その生活至上主義が「自己一身の享楽を目的」とさせ、そのための「自由平等仁愛はここに全く道徳精神を喪失したる放縱なる自由主義、共産主義、利己主義と云ふ自己本位のものに墮落して居る」とする。(2-7:4) 続く阿部仁三は、陸軍省報道部嘱託であり、この頃には講談社顧問である。

「戦争・出版・思想」と題する論考で、阿部は、出版界の変化が国民思想の転換を本当にもたらしているかと問いかける。阿部は、12月7日以前の風潮が現在の戦争論にも入り込んでいると指摘し、「大東亜戦争を戦ふ日本人として考へるよりも前に、人間として大東亜戦争に注文をつける、といった風な句を感じず」論文があるとする。(2-7:7)「従来我々は余りに外部の事柄について云々しすぎた いふべきこと考ふべきことは先づ我々の内にある」として、阿部は戦争の知的な探究ではなく、国民としての内向きの反省を要求するのである。(2-7:7)

阿部の次は海軍省教育局嘱託で海軍少佐の柳沼七郎である。柳沼は祖孫関係を「人間界進歩の最大推進力」として個人的・抽象的な自由主義を批判し、日本人ではなく人間を本位とする考への愚劣さを説いている。(2-7:8-10) 他方、文協勤務の岩井主藏による「最近の主な経済書の動向」は、近刊書籍を専門的に論評するものである。特集最後の満田巖は情報局嘱託であり、講談社の顧問である。満田は、戦争が「新しい文化の原動力」となり、「國體自覚への意欲が古典の復活」となったことを寿ぐ。(2-7:12) そのうえで、日本思想の確立のため「先づ一定の方向を確立すべき」とし、「それを規準として現在の無秩序な出版方法が、より計画的に組織化されることが必要である」と力説している。(2-7:13)

この特集の執筆者たちは良書の出版を求めている。それを阻害するものとして松本は出版社の商業主義、満田は「無秩序な出版方法」を批判して、ともに統制組織強化の必要性を説くのである。他方、満田が方向性の確立を求め、阿部が内向きの反省を求めて、両者合わされば内向きの反省の強制、あるいは彼らの思想の標準化の要求となる。

これに対して新著月評は、まだ落ち着いた雰囲気強い。歴史の小林元と国文学の岩崎萬喜夫が、新たな担当者である。陸軍予科士官学校教授の小林は、歴史と民族に関する近刊書を広く紹介する。岩崎は「国文学者の間にいささか物議を醸す嫌ひがないでもないが」と記したうえで、保田與重郎の『古典論』と『和泉式部私抄』を高く評価している。(2-7:34)「俗流便乗論」を批判する岩崎は、保田の年来の努力を顕彰し、国文学者が学問ではないとその努力に距離を置くことを嘆きつつ、保田には「やや新巻濫発の嫌ひある」と苦言を呈するのである。(2-7:35-36)

他方、岩崎は、吉村貞司の『国文学史(第一分冊)』と『悲劇の系譜』について、「論理的構成の故を以て西洋の文を貶する」姿勢が、かつてそのために「我が文物の貶された」ことを想起させるとし、「その方法の蕪雑と恣意は折角の意図を活かし得ず、徒らな素人談義となり終る危険性を持ってゐる」との厳しい評価を下している。(2-7:36) ちなみに吉村は、前号で「古代の復活」と題する小文を寄稿し、「米英を怯懦ならしめてゐるのは、自然科学的生命観である」と断じていた。(2-6:7) 吉村は次号から現代文学を3回担当している。

哲学思想の小野正康、教育の吉田昇、地政学の江澤讓爾、法律の峯村光郎、児童読物の與田準一、大衆読物の棟田博、科学の緒方富雄と篠遠喜人、現代文学の平野謙、経済の大熊信行は継続である。江澤は、高田保馬や高坂正顕の民族論を批判的に紹介し、地政学では国土を重視し、これを民族論の基礎にするとしている。(2-7:38-39) 大熊は飯島の『昭和維新』を好意的に紹介し、国防国家が資本主義体制からの根本的な転換であることの自覚があると賞賛する。(2-7:53-54) 大熊からすれば、飯島は財閥の否定には慎重なものの、自由主義時代を過去のものとし、昭和維新の意味を平明に説き明かそうとしているのである。(2-7:52-53) これは、飯島を日本の敵と弾劾する人びととは相容れない評価である。

2巻8号は読書随筆特集である。海軍造船中将の永村清は、近年の読書熱のすさまじさに言及し、「電車の中など新聞か書物かを手にして居ない人は殆んど無い」と書いている。(2-8:3) 國學院大學教授で音楽学者の

田邊尚雄は、出版界の好景気に便乗して質の低い研究書が出版されていると慨嘆する。(2-8:4) 他にも穏やかな随筆が掲載されるものの、今後の『読書人』の攻撃的な論調に関係深い人びとも本号に登場する。

その一人が、『読書人』には初出の田中忠雄である。「鵜の目・鷹の目——「三四郎」教授について」と題する随筆で、田中は、引用のために線を引く読書態度を揶揄し、「むかしは古書に対しては、これをおしただいて読んだ」としている。(2-8:2) 当今の学者の態度に対する批判である。

もう一人は原理日本社の蓑田胸喜である。蓑田は「人生観入信——読書自伝の一齣」と題し、読書が心を動かし、自己の存在を揺り動かす体験をもたらしたと記している。「宗教哲学的要求に苦悶しつつあった当時の読書は身読といふ言葉で表現したき衝動を今も覚えしむ」との回想である。(2-8:9)

最後の一人が、佐藤通次である。当時は九州帝国大学助教授であった佐藤は、「読書の志気」と題し、「事行主体の立場に立って書籍のコトバを受ける事が読書の本義である」とする。(2-8:11) 読書の本来の対象は、「拝誦すべき又は信授すべき詔勅、経典、古典、又はその述義や論考」なのであって、これらの「権威あるコトバ」を「生命の緊張」をもって、「自己の現実に生きる人生を正しく美しく実現せんとする志気に包んで」読まねばならない、とするのである。(2-8:10-11)

三人の随筆は攻撃的ではなく、読書についての一つの立場の提示となっている。それでは彼らの立場は、どのように理解すべきものであろうか。彼らの読書論は、知的な探究への喜びそれ自体を評価するものではない。客観的な知識よりも主観的な信念や体験を志向するものであり、知的に生きることを低く評価している。知的に生きることによって、人間は創造的かつ主体的に生きることができるとは考えないのである。

学んで知ることによって人間が賢さに至ろうとする知的な生き方を拒絶する心性を反知性主義と呼ぶのであれば、彼らの読書論は、まさに反知性主義的な読書論であろう。(植村 2020:75) まもなく『読書人』誌上では、

このような読書論が顕著になっていくのである。

これに対して新著月評は、従来の良書推奨の論調が強い。編集後記で渡邊保雄は、各方面からの好評を得て14部門の「総合書評欄としての充実を加えた」と記し、誇らしげである。(2-8:56) その一方で渡邊は、良書推薦を行なうのみならず、「自ら悪書追放の真摯なる具体をも示さむとする」として、特に小沼洋夫の「既往の文化通念の惰性的感覚を衝いた試み」を賞賛している。(2-8:56)

新著月評欄の新規担当者は、哲学思想の小沼洋夫、短歌の山本英吉、現代文学の吉村貞司、科学の天野清、再担当者は大衆読物の中谷博である。文部省教学局教学官の小沼は、「多く読まれるだらう思想書」について」と題し、読者に人気の高い思想書を論評する。小沼はまず三木清の『続哲学ノート』を取り上げ、内容を紹介したうえで、「著者の考へてゐる様な正しいヒューマンイズムの基礎」を、なぜ「我が国の先哲思想家の思想、乃至東洋学の中に見出されないものであらうか」と疑問を呈す。(2-8:21) ヨーロッパ思想を経由し西田哲学に進むのではなく、もっと「我が国思想界のマンネリズムを打破する」思想書を出してほしいとの要望である。(2-8:21)

小沼はさらに、清水幾太郎の『思想の展開』や室伏高信の『新青年の書』に対しても、なぜヨーロッパの思想ばかり紹介するのかと不満を表明する。(2-8:21) また、下程勇吉の『天道と人道』の二宮尊徳論を評価しつつも、叙述が難解で論理的にすぎると苦言を呈する。(2-8:22) 「総じて現在指導的立場に立つ思想家が思想を説く場合、論理的表現に意を注ぐことに必要以上の努力が払はれ、その爲無用の素材によって読者は思想的に迂路を辿らせられることが甚だ多いのでなからうか」。(2-8:22) こう述べる小沼は、文部省の志水義暲による『國體と思想国防』の平易さと思想的深みを推奨して、担当欄を締め括っている。(2-8:22) なお、本号以降でも繰り返される小沼の攻撃的な書評が、文部省の政策方針とどこまで連動していたかは不明である。

これに対して、歴史を前号から担当する小林元は、戦争の現実を傍観す

ることなく、新しい歴史学の構築に意欲的に取り組む西洋史学者たちを評価し、中山治一と鈴木成高の著書を挙げている。(2-8:23、25) 鈴木の本は、翌年の『読書人』で弾劾されるものである。

国文学の岩崎萬喜夫は、万葉集関係の出版物が近年多く、その「大半が啓蒙書」であり、やや「安易な傾向」が見られると批判する。(2-8:30) 岩崎は、「古典の大衆への浸透が望ましいといっても、それはオブラートにくるんで与へるといった行き方でなされてはならない」と苦言を呈するのである。(2-8:31) 他方、大衆読物の中谷博は、今日の情勢への「努力と心構へ」が無かった文壇文学の後退は当然としつつも、氾濫する大衆文学の質の低さを批判し、出版者は「一種国士を以って任ずるところの気概を有してゐて貰ひたい」とする。(2-8:50) いずれも、出版企画の質確保の要望である。

第9号は一転して、「満洲国文化の動向と文献——建国10周年慶祝特集」である。おそらくはこのために、本号は総計156頁、本文90頁に増量されている。編集後記では高橋が駐日満洲国大使館への謝辞を記し、渡邊が日中戦争初期の2年半に及んだ満ソ国境守備経験を回顧している。(2-8:90) 渡邊は、「名もなき民のたらはぬ力なれど、しかも秋烈の気迫もてこの『読書人』こそ、皇国出版文化建設の決意の凝集地点であり、明鏡たらしめざるべからずと念願して止まぬ」との決意を述べている。(2-8:90)

特集の冒頭は、満洲国国務院総務庁弘報処長の武藤富男の講演記録である。武藤は、文化政策を満洲建国の「精神的建設工作」と位置付け、これに積極的に取り組んでいく意欲を表明する。(2-9:3) 「芸術には国境はありません」とする武藤は、世界最高水準にある日本の芸術や文学を取り入れて、満洲国独自の芸術文化を建設することを呼びかけている。(2-9:3-5)

続く特集の大半は、各分野の研究動向と文献紹介である。それぞれ行き届いた検討が行われている。満洲事情案内所所長の奥村義信が総説を担当し、満洲国での出版は毎月15万冊程度であり、日本からの輸入雑誌が毎

月 70 万冊、輸入書籍が 40 万冊であると紹介している。(2-9:10) 東亜民俗研究所主宰の本山桂川によれば、この案内所は 1939 年 12 月に「満洲国政府全額出資の準特殊会社」になった紹介機関である。(2-9:27)

満州国の出版状況については、満洲書籍配給株式会社(満配)常務の田中總一郎も報告を行っている。田中は、満州国での出版物の 8 割近くが日本からの輸入であると指摘し、満配が唯一の指定輸入機関となつて一元的に配給していると説明する。(2-9:48) そのうえで日本の出版業者に対して、「満系国民を対象とする図書の出版に積極的企画を策して貰ひたい」との要望を示している。(2-9:49) 満州国の読書人層は推定で 1000 万人前後とのことである。

特集の内容は充実しており、興味深いものである。ただ、富士登山の小文を寄せた白文會駐日満洲国大使館政務科長を除けば、執筆者は全員日本名である。

本号の新著月評の新規担当者は教育の平塚益徳、科学の原島進である。本号でも良書を紹介する雰囲気強く、歴史の小林元、法律の峯村光郎、経済の大熊信行をはじめ、文学、美術、科学も広く見渡せる構成となっている。

攻撃的な論調であるのは、前号に続いて哲学思想の小沼である。小沼は今号では倫理学書を取り上げ、「皇国の道に基く実践哲学の樹立」こそが今日の課題であるとする。(2-9:76) しかし、近刊書の努力を評価はしつつも、「日本の理念に基く普遍的理法の把握は、今迄多く見られた様な欧羅巴的理を媒介とする方法のみを以てしては決してなされない」とし、「我が肇国の歴史事実や先哲忠烈の士と仰がるる先人の行績」への論及が少なくと批判する。(2-9:78) さらに、和辻の『倫理学』中巻は著者の国民的自覚に裏打ちされているものの、解釈学的立場を固守しての論述は、「結局テオリヤの世界に踏み止る」ものであると批判する。(2-9:78) それでは、「倫理の主体的実践的把握へ道を与へる」学問を求める小沼の立場とは、「隔たりが大きい」のである。(2-9:78)

東京帝国大学文学部倫理学科を 1930 年に卒業した小沼は、文部省勤務

から弘前高等学校教授を経て、この頃は教学官であった。関口隆克の回想によれば、和辻哲郎と西田幾多郎への批判のあり方を憂慮して、1943年に会った際に真意を小沼に問うてみると、「両先生の国民道徳、人間の道のとらえ方が、道徳の世界性と普遍的を探究するのあまり、抽象的に流れすぎて、具体的、歴史的な、実在として本来国民的、国家的である点への配慮が欠けているくらいがあり」、「敢えて忠諫を試み」ているとの返答であった。(小沼：302)

昆野伸幸によれば、1942年5月に教学官に就任した小沼は、「文部省の言う「国体の明徴」を「皇国史観の確立」と言い換え、「日本世界観」の徹底と「皇国史観」の確立とを一体化して捉え」ていた。(昆野：230) 昆野は、マルクス主義に好意的であった1930年代初めから、小沼は理論よりも「現実・事実を尊重する」立場では一貫していると指摘する。(昆野：232)、小沼からすれば、西洋近代思想を原理的に敵としてはじめて受容も許されるのであり、思想戦の本義を理解できない和辻や西田は、現実には無知な思想家なのである。(昆野：382-383)

小沼の遺稿集の編集発行人代表となった平塚は、今号から教育の担当である。ただし、平塚が小沼と親しくなったのは1963年の国立教育研究所時代であり、戦前には交流はなかったようである。(小沼：i) 平塚は、伏見猛彌、阿部仁三、鈴木庫三と東京帝国大学教育学研究室の同窓である。実現には至らなかったものの1940年6月には一同で、平塚の関与する広島文理大学に教育国家建設研究室を設立する協議を行う親密さであった。(佐藤：264)

平塚は、数年前の教育界の出版物には「悪傾向」があり、他書の剽窃や流行への便乗が目につくと嘆いている。(2-9：70) 出版新体制によって、これは「著しく是正された」ものの、国民学校の錬成を巡る議論が最近活発化しており、「悪質ジャーナリストに再び跳梁の余地を与え兼ねぬ」として警戒を呼びかけている。(2-9：71)

国文学の岩崎萬喜夫は、保田與重郎の伴家持論を高く評価し、家持を「文弱の才人視する通念」を批判する。(2-9：54) それは、保田を「容れ

得ざる学界を憐む」との批判でもある。(2-9:56) 他方、現代文学の吉村貞司は、「自由主義の克服」を今日の課題として、比較文学の方法は「民族的優越感」を持たなければ有害になると説く。(2-9:57-58) この「民族的優越の根源を探ることは、比較文学以上に」重要であり、伝統を真摯に考究すべきであると主張するのである。(2-9:58)

吉村は、「知識以前、芸術以前に民としての志がなければならない」とし、「志あれば国学と呼び得たものが、志を喪って国文学の名で叫ばれるに至る」とする。(2-9:58) その立場から吉村が特に推奨するのは、東京堂から刊行された斎藤瀏の『防人の歌』と、天理時報社から刊行された中谷孝雄の『旅情』である。

第10号の特集は、「日本世界観の体得」である。冒頭には蓑田胸喜の「『明治天皇御集』に世界観原理を仰ぎまつりて」が掲載されている。蓑田は、「詔勅御製に自己の世界観また国策の原理を仰ぎまつらざるものは、その標榜する名義の如何に拘らず、凡て人生観上の自由主義者であり政治思想上の民主主義者である」と弾劾する。(2-10:5) さらに、「臣道実践の垂範指導者」として、「その自己錬成のために日本の大臣は和歌を学び思想批判力を養はねばならない」と要求する。(2-10:6) 世界観や国策原理を探究したり構想したりすることを許してはならないとの主張であり、和歌を学ばずに日本で政治はできないとの主張である。なお、三井甲之の『明治天皇御集研究』は1942年6月に東京堂から5000部重版されている。

蓑田の次は岩井主藏の「日本世界観と政治経済理論とを貫くものを求めて」である。岩井は、大熊信行の思想と学説に自己の原理を求めるとしている。(2-10:6) 蓑田の主張との整合性に、強く疑問が残る配列である。続く小野正康は、「『みそぎ』を通して見たる皇国世界史(上)」で、日本学を大正末頃から提唱したと回顧し、みそぎの意義を解説する。(2-10:7-12) 体得の経験の紹介であるものの、上のみでの掲載というのは特集としては不思議である。

最後は、東京高等師範学校助教授の伊藤栄四郎の「日本世界観の成立と把握」である。伊藤は、「無窮の生成顕開」を本質的性格とする日本の

「国家生命」は当然「自らの中に世界的規模を固有してゐる」と主張する。(2-10:13) つまり、内向きの自覚において世界はすでに存在し、世界観獲得のために日本以外の世界は必要ないとの主張である。

特集には指標と題する小文も含まれていた。第六高等学校教授の藤戸正二は、「腐朽せる旧世界観」の一掃を呼びかけ、(2-10:10) 志村陸城は世界観に右往左往する「文化的敗北主義」を批判する。(2-10:54) 精神科学研究所所員の南波怨一は、日本世界観は「最も歴史的」であり、それゆえ「最も強力且普遍的」と主張する。(2-10:61) 志村は二・二六事件で軍籍を剥奪された陸軍中尉であり、この頃は仏教圏協会の設立などを通じて大東亜共栄圏での宗教宣撫工作要員の育成に尽力していた。(大澤:108-125) 南波は原理日本社と関係の深い日本学生協会の幹部でもあり、この頃すでに、協会も研究所も東條英機政権に対立的な組織として当局に警戒されていた。(井上:152、158)

この企画について、渡邊は蓑田の文に感動したと記し、高橋は新進の伊藤、岩井の「清新な論文」に謝意を表している。(2-10:62) 後記の冒頭には、三井の代表歌である「ますらをのかなしきいのちつみ重ね つみ重ねまもる大和島根を」が掲載されている。(2-10:62)

しかし、編集者は自賛するものの、特集としては質量ともに、率直に言ってみれば見劣りがするものである。何か、原稿が集まらずに無理に構成したようにも感じられてならない。帰一随順の立場を採り、日本世界観の探究ではなく体得を求めるからには、正解はすでに存在しているはずであり、複数の見解が提示されるのは都合が悪いのではないか。

そのためであろうか、蓑田の文章でさえ迫力を欠いている。逆に言えば、この立場は他者を否定し、排撃することによって生き生きするのであり、その代表的な体現者が蓑田なのであろう。日本世界観への帰一随順を説くことが多くなるとともに、『読書人』の論調は攻撃的になっていく。そうしなければ、誌面は沈滞していかざるをえないのである。

本号から、新著月評とは別に雑誌月評の欄が設けられている。担当は、専修大学教授の高野正巳である。高野は、「俗悪低級」と批判された少国

民雑誌の出版業者は、責任を作家に転嫁せず、子供向け作家の育成に努力すべきであると注文を付けている。(2-10:23)

新著月評では、おおむね穏やかに良書が紹介されている。新規の担当者は国文学の風巻景次郎、科学の田中実と中村浩、児童読物の菅忠道、大衆読物の海野十三である。風巻は、国文学者が「専門技術家」になりすぎて、「一国の文化の運命」についての見識を持った発言が「全くないに近いと言はれても返すに言葉がない」と反省する。(2-10:39) 風巻は、そのような発言は国文学の外部から、青野季吉、浅野晃、亀井勝一郎、中河與一、保田與重郎から発せられたと評価している。(2-10:39)

風巻はさらに、「新しい文学の在り方は、遠大な歴史理解を背景にしてのみ直観されうであらう」とし、国文学は学問として、その理解に貢献すべきであるとする。(2-10:40) 風巻は、「国学は真の意味に於て今日の日本の哲学であらねばならぬ」とする一方、「国学と袖を分つて文学と名のつた」国文学は、「今日の文学の問題について真実の智慧」でなければならぬと主張するのである。(2-10:40)

哲学思想の小沼は、今回が最後の担当である。思想界が表面的には「国家の要請する方向へと転換して久しい」としながらも、小沼は、「戦慄すべき真相」を暴露する。(2-10:30) 小沼によれば、具体的・主体的に論じるように見える「思想家の態度」に、「抽象的な、批評で満足する思弁主義」やヨーロッパの理論や体系に拝跪して日本を「平板的に」論じる「危険思想」が実は隠されているのである。(2-10:30) 「日本人の学問」に基づいているかどうかが決定的に重要であるとする小沼は、普遍妥当性や抽象的な真理によって日本を論評するなどもつての外であるとする。(2-10:31)

このような立場から小沼が高く評価するのは、吉田三郎の『思想戦』と蓑田胸喜の『国防哲学』である。小沼によれば、吉田は「思想戦的立場に於いてする学問が本質的学問でなければならぬ」と説き、蓑田は「学問そのものが国防性を持たねばならぬ」と説いて、両者の立場は一致している。(2-10:32) 小沼は他にも、花見達二の論考「国際主義者の詐罔」や前田

隆一の『生れ出づる日本科学』を賞賛している。(2-10:30、32) 吉田、花見、前田は講談社の顧問である。

なお、昆野伸幸によれば、小沼と吉田は友人であったものの、吉田の側に文部省への強烈な不満が存在していた。(昆野:236) 昆野は、吉田が「文部省の施策の抽象性」を繰り返し批判し、この頃には、文部省を「一応廃絶」して陸軍省に所属させるとの提言まで行っていたと指摘している。(昆野:236、240)

本号の編集後記で渡邊は、「日本世界観体得の爲の読書について」次号で座談会を公表すると予告している。これは9月15日に実施されたものであり、(2-11:17)「古典の正しき読み方を、中心として一般読書論に及び、青少年の読書指導にも具体的に触れた、類のない、白熱の座談会であると自負出来る」とのことである。(2-10:62)「記者も感奮興起せしめられた」と書く渡邊に高橋も同意し、「ますます皇国編集者道に直進する決意を固くした」と述べている。(2-10:62)

この座談会「新しい読書の道」は、11号の冒頭に掲載されている。参加者は、東京慈恵会医科大学教授の浦本政三郎、文部省図書監修官の釘本久春、精神科学研究所の桑原暁一、朝日新聞社出版部の島田春雄、評論家の田中忠雄、『文藝日本』主幹の牧野吉晴、東京堂出版部長の増山新一である。発行兼編集人である増山の誌面への登場は初めてであり、この座談会は異例の重みを持つと言えるであろう。

司会は田中である。座談はまず主体的な読書とは何かから始まる。桑原は「直接ぶつかって自分の身をもって読んで行く」ことを説き、(2-11:2) 田中は、主体的という言葉に惑わされず、「特に古典を読む場合は「我を空しく」して「参じて行く」べきとする。(2-11:4) 牧野は「ひれ伏し拝むといふ精神」を培っていくべきとし、(2-11:4) 釘本は日本の古典に、「民心の内面的な要求を向はせることが、ジャーナリズムなり文化政策の重要な仕事」であるとする。(2-11:6)

そのうえで議題は「書物による教育指導」へと移り、釘本は、「日本の道をなんとかして一般にはっきりさせること」が読書の問題であり教育の

問題であるとする。(2-11:8) 増山はこれに応じて、日本の道を「求めて人達になんらかの方向を与へてやる」ことに『読書人』の使命はあると思うとする。(2-11:8) そこで悪書排撃の必要性を提案するのが田中である。田中は書評が妥協的であると批判し、これに賛同する島田は、文部省や出版文化協会が「悪書の排撃」を実行すべきと主張する。(2-11:8) これに文部省の釘本は「悪書の排撃と良書の推薦とは、相即不離の関係にある」と肯定的に応じ、「悪書を排撃する根本理念がはっきりしてゐなければ、良書の推薦も出来ない」と述べている。(2-11:8)

釘本は、単なる新刊紹介ではなく専門的で良心的な書評なら「結構です」とし、「その上に、更に読書指導の一部としての書評に於て、古い本であればいいものも」紹介し、「悪い影響を与へるやうなものは、これを悪いと言ってはっきり指摘する必要がある」とする。(2-11:8) ただし釘本は、座談会の最後に、「これは西洋的だ、これはなんだとゲー・ペー・ウーみたいないぢけた態度で低調な批評、計算を」やっていたは「日本の大きな発展はない」として、橋本左内、吉田松陰とともに蘭学者の杉田玄白、大槻玄沢の名を挙げている。(2-11:17) ゲー・ペー・ウーはソ連の秘密警察の当時の名称である。釘本の主意は西洋排撃ではないと推定されるものの、田中やこれ以降の『読書人』は、まさに、「これは西洋的だ」と弾劾する国内思想戦に力を入れていくのである。

この頃は、文協内部で書評誌創刊の動きが進み、杉浦明平が書評雑誌の編集責任者の予定で文協に就職した時期である。増山は東京堂出版部長として、書評誌の個性をもっと強く打ち出すべきとの危機感を持って座談会に参加し、今後の編集方針を模索していたのかもしれない。

いずれにせよ、「悪書の排撃」は特に翌年以降の『読書人』の特徴となっていく。編集部員も座談に感激しており、この方針に賛同したはずである。とりわけ渡邊は、8号の編集後記で小沼を賞賛し、悪書追放の意欲を示していた。なお、編集部が田中に司会を依頼した理由は、筆者には現在不明である。田中は1929年に京都帝国大学文学部哲学科を卒業し、37年に文学雑誌『リアル』の活動によって治安維持法違反とされ、39年ま

で投獄されていた。(田中忠雄：40-41) 東亜研究所勤務を経て、この頃には評論家として、9月に『古仏道元』を不二書房から刊行している。一度しか『読書人』に執筆せず、東京堂から著書を刊行してもいない田中は、翌年以降の誌面でなぜか主役のような役割を果たすのである。

座談会は別として、今号の書評月評も落ち着いた雰囲気であった。担当者は多数交代し、哲学思想の豊川昇、歴史の松田壽男、経済の酒枝義旗と原祐三、政治の清水伸、現代文学の那須辰造が新規である。学習院教授の豊川は、紀平正美を「ひたすらに日本に随順し、学者としての本来の面目を忘れなかった」「憂国の学者」と顕彰する。(2-11：33) 京城帝国大学教授の松田は、急増するアジア関係の翻訳書の質の低さと、欧米人著者への盲従に苦言を呈している。(2-11：36) 早稲田大学教授の酒枝は大熊の推薦による後任である。(2-11：8)

吉田三郎が新たに担当した雑誌月評でも、「総合雑誌の動向」がかなり好意的に論じられている。記載される吉田の肩書きは、興亜院錬成官である。吉田は、『中央公論』や『改造』でさえ「総じて国を憂へる誠を示しはじめて来たやうに思われる」とし、『文藝春秋』と『現代』は特に「逐次逞しい編集振りを見せてゐる」と評価する。(2-11：22-23) ただし、各誌が南方や独ソ戦、インド問題に集中しすぎており、満洲・朝鮮・中国問題への関心をもっと喚起すべきではないかとの苦言も呈している。(2-11：23)

吉田は、特に高く評価する著者として保田與重郎と影山正治を挙げている。「志士の魂を自らの魂として洵の国生みをなすことが最も切実な問題」とするからであろう。(2-11：24) 他方、和辻哲郎には批判的であり、前田隆一が『現代』の座談会で、和辻はヨーロッパの学問を過大評価していると批判したことをわざわざ好意的に紹介している。(2-11：22-23)

本号の編集後記欄には明治天皇御製が掲げられ、増山部長をはじめ出版部員の短歌や俳句が掲載されている。(2-11：62) 作品の掲載は以前にもあったものの、これは前号の蓑田の主張に応じたものかもしれない。

12号の特集は全書評である。冒頭には斎藤瀏の「死線を超えよ」が掲

げられ、空前の戦果の中でも無意識に利敵に陥らないよう真剣に生きることが呼びかけられている。(2-12:1) 編集後記には、これに応じたかのような編集部の決意が語られる。渡邊は、「いよいよ熱誠に、純乎たる日本書評欄の確立を期したい」とし、石井は「我らの内心の幕府を反省」して「御国に仕奉らむ思ひを無意識とは言へ妨げてゐる一連の思想がある」と断定する。(2-12:54) 石井は哲学書の流行に疑念を呈しており、翌年7月号の特集「哲学書批判」による京都学派攻撃への予兆が感じられる。とりわけ、主任の高橋の決意表明は、国内思想戦の宣戦布告のように感じられるものであり、ここに全文を引用する。

「編集者は編集に依って皇国の民の志を慫へる。編集者の生き方は此の道一筋につながる。

道を行ずる者に行過ぎてうことはあり得ない。むしろ誠を勤めることに於て怠りなきかを省み、ひたすら鞭うち進まんと思ふのみである。

世に議論多きを憂ふる人がゐる。或は議論よりも実行とも云ふ。さりながら謬論横行する時は、先ず謬論を打ち破らねばならぬ。言行相伴って、言痛き謬論を打破することこそ志士の勤めがある。

今の世のかかる志士を求めて相携へて進むことに我等の志がある」。(2-12:54)

高橋は、謬論を打破する志士に行き過ぎはないとする。その際、謬論と判定する根拠は判定者が日本の道と自称するものであり、その正しさを証明せずとも謬論を打破すべきであるとする。志士を自称する人間には、編集部員も含めて、すべてが許されるのである。

このような雰囲気の変化は、意外なことに、新著月評にはそれほど反映されていない。今号は書評特集として15分野に20人の担当者が配置され、新規は、政治の阿部隆一、経済の土屋宗太郎、美術の望月信哉、演劇の山本二郎、翻訳の荒川龍彦、科学の中井淳、現代文学の那須辰造、大衆読物の牧野吉晴、運動の鈴木惣太郎である。11号の座談会に参加した牧野も、今号では良書の推奨に徹している。

原理日本社の阿部は、思想戦論の典型として野村重臣の『戦争と思想』

を挙げ、「世界人類文化史の開展に対する総撰的認識と人類生活の統御的実践原理の把握が欠けて」いて、「此の程度の思想レベルでは敵を畏怖せしむ威力がない」と酷評している。(2-12:11) 阿部は「外的形式的分類批判」では「隠微なる思想的偽装を看破」できないとして、原理日本社の立場から、野村をはじめとする「思想戦の論客の大部分」に注文を付けるのである。(2-12:12)

野村は、12月23日発足の大日本言論報国会では常務理事・調査部長に就任し、国内思想戦を強力に推進していく。(赤澤:43) その言論に「威力」はなくても、政治的に威力を持つ立場に就任すれば強者である。原理日本社の末期を支えた阿部は、戦後は慶應義塾大学教授・附属研究所斯道文庫長である。

哲学思想の豊川昇は、田中忠雄の『古仏道元』を絶賛し、「近來の饒舌なる西洋ぶりの哲学者」たちには「奥行と重量」を持つとする。(2-12:24) これに対して高山岩男の『世界史の哲学』は、「世界史の観想を以て学と」する「西洋風の歴史観」であるとして、大著ながら「歴史の志気がない」と酷評する。(2-12:24-25) 「無内容なる抽象概念を弄することなく、宜しく日本歴史に参すべきであると信ずる」との信念の告白が、豊川の書評である。(2-12:25)

今号の雑誌月評の担当は、精神科学研究所の房内幸成である。房内は婦人雑誌を概観して、著者では斎藤响、亀井勝一郎、田中忠雄、中谷孝雄を評価する。(2-12:49) そのうえで、各誌で「アララギ一派の歌人たちが、その弛緩した乱調の歌によって国語を毒してゐる」と批判する。(2-12:49) 1944年に東京堂から『天朝の御学風』を刊行した房内は、「三井甲之先生のみ教のままに、朝夕に明治天皇御集を拝誦して来た」と記す歌人であり国学者である。(房内:跋1)

三井は、伊藤左千夫の委嘱を受けて1908年2月に『アカネ』を創刊し、一時は正岡子規の後継たらんとしたものの、疎隔した伊藤が10月に『阿羅々木』を創刊して、両者の対立は決定的となったのである。(木下:92-96)

こうして1942年後半の『読書人』は、11月号掲載の座談会を分水嶺として第3巻へと進んで行くこととなる。東京堂の従来の出版方針や編集部在意気込みに鑑みれば、これは決して編集方針の転換ではなく、あくまでも重点の変化として理解すべきものであろう。戦後の社史に増山が記した「書評雑誌を逸脱した編集内容や思想傾向」の時期である。(東京堂：412)

第5章 1943年前半の『読書人』

1943年の『読書人』第3巻は計12号の刊行である。しかし、従来の120頁前後を維持できたのは1号のみであり、2号から4号は100頁前後、5号からは70頁前後と減少している。新刊分類目録などを除いた本文は、これまで同様総頁数の半分強である。

この頃、戦況の悪化と用紙不足は統制の強化をもたらしていた。1943年版の『日本出版年鑑』には、文協設立以来2年を経過し、「自由主義的な思想を払拭し、営利主義的な経営を蟬脱し健全な新日本文化の建設並に高度国防国家の確立に挺身するといふ当時の指導目標は最早すでに手緩く、もっと端的に、出版界は思想戦の兵器廠たらざるべからずとの要求が強く奔流して来た」とあり、日本出版会設立の概要が解説されている。(年鑑：307)

この解説によれば、「出版事業の総合的統制運営」の「国策立案並に遂行に協力せしむべき団体」の法的根拠の必要性が痛感された結果、1943年2月18日に出版事業令並に同施行規則の公布となり、19日付の設立命令に基づいて、3月11日に日本出版会の創立総会開催となるのである。(年鑑：308)

『資料年表日配時代史』は、1942年12月17日に「国家総動員による出版事業令案の正式決定を見、いよいよ企業整備の断行近し、と業者の骨身に痛く感じさせた」と記している。(荘司・清水：29) 言論・出版統制の強化のみならず、出版企業の整理が政策課題として近付いてきたという実感である。

なお、年鑑の解説は新機構の特徴として、局制ではなく部制とし、雑誌部を書籍部、配給部、総務部、業務部と並べて設置したことを指摘している。(年鑑：308) 年鑑によれば、この雑誌重視の方針は、「読書人に非る人の読書」「読書の観念を以てせざる読書」への指導を通じて「勤労大衆、すなはち非教養層への直接的なはたらきかけ」を強化し、「国民総力の動員結集」を実現するためであった。(年鑑：309) 従来の出版指導で重点とした書籍が主に「知識層、教養層」向けのものであるのに対して、雑誌は、より「国民に親しまれ易い」媒体であるからである。(年鑑：309)

『読書人』の論調の重点変化は、まさにこのような状況のなかで生じたものであった。読書人向けに書籍の書評を提供する『読書人』にとって、この方針は追い風にはなりにくく、雑誌存続の見込みは予断を許さなかったことであろう。

第1号の冒頭は「大詔奉戴の第二新春を寿ぎまつる」として、三井甲之と窪田空穂の歌が掲げられている。それに続く南波恕一の年頭所感は、「日本國體の尊嚴に対する信」を説き、「国民精神の内面的強化充実」を2年目の根本課題と位置付けるものである。(3-1：2)

特集は「座右の書」である。神宮皇學館大学助教授の高橋峻は、編集部への依頼が「参入してをる書物」であったとし、意味がよく分からないしつつも古事記を挙げている。(3-1：4) 田中忠雄は「うひ山ぶみ」である。「久しく学んで来たいはゆる哲学なるものを捨てて」以降、この書物が「身心に迫る」ようになったと田中は記している。(3-1：6-7) 精神科学研究所の高橋鴻助は講孟余話、三井甲之の盟友松本彦次郎は神皇正統記、海軍少将の匠^{そう}磋嵐次は淮南子である。佐賀高等学校教授を辞して研究所に参加した高橋鴻助は、第八高等学校教授を辞した房内とともに、田所廣泰や小田村寅二郎、南波たち若手の思想的政治運動を支える立場にあった。(小田村：204)

初めて寄稿する浅野晃は、岡倉天心の『東洋の理想』である。浅野は影山正治との1979年の対談で、東大新人会から日本共産党を経た後、1935年の暮れに天心に出会って「マルクスに代る日本の方法」といったもの

をつかんだやうに思った」と回想している。(浅野・影山：240) 影山もこれに応じて、やがて浅野との「道交」が開け、「広い意味での日本浪漫派運動、文化維新運動、新国学運動——昭和維新運動を共にするやうに」なったとしている。(浅野・影山：242)

なお、この企画では葉書での問い合わせも企画され、38人から返答が寄せられている。特に注目すべきは、佐藤通次の返信である。佐藤は明治天皇御製集を挙げ、「日本の哲学は御製の述義として展開すべきもの」としている。(3-1：11-12)

特集に続く論考で浦本政三郎は、「哲学の氾濫などとの声を聞く程、一昨年あたりから随分華々しかった」とし、「思想の批判的根底をなす哲学の役目も亦重大」として「日本哲学の形成」への期待を表明している。(3-1：19) ただし浦本は、「京都学派圧倒的」である哲学の現状に不満は示しつつも罵倒などはしていない。

文藝春秋の下島漣は編集者としての思いを語り、文章の根底には「歌の精神」がないと「読む者の心を動かさない」とする一方、主張を憚るような思想は「当局を待つまでもなく、編集者が自己の責任に於いて取り締まるべきだ」と主張している。(3-1：21) 下島は第7号の京都学派攻撃への参加者である。戦後の回想で下島は、和辻哲郎を攻撃する『文藝春秋』の座談会に憤激した菊池寛によって、文藝春秋を1944年に退社させられたとしている。(大草他：297)

新著月評では教育の坂本稲太郎、児童読物の関英雄、経済の杉山清が新規である。坂本は国民精神文化研究所の助手である。哲学思想の豊川昇は、生理学者の杉靖三郎の『科学と伝統』、佐藤通次の『ファウスト論』、房内幸成訳のヴィルヘルム・ヴント『諸国民とその哲学』を推奨する。(3-1：26-27) ヴントは三井や蓑田がきわめて高く評価する学者である。なお、「何かいふと、「なければならぬ」といふやうな言葉を連発するのが、日本語としてはその人の傲慢性を示してゐる」と書いているのは、西田幾多郎への陰口であろう。(3-1：26)

政治の阿部隆一は、大串兎代夫に共感を表明しつつも、日本世界観の提

示が概念的に止まると批判している。(3-1:28) 大衆読物の牧野吉晴は、大鹿卓の小説を一流作品と推奨する。(3-1:33) 牧野と大鹿は『文藝日本』の同人である。経済と科学の欄はいつものように堅実な書評となっている。科学の緒方富雄の「悪書を指摘する」は、著名な著者の科学出版物が代作であり、誤りだらけであることの指摘であった。(3-1:47)

編集後記で渡邊は、「新著月評欄が終始一貫、厳正公明にして烈々の志をいたす唯一の総合書評欄として、名声を確立した」と誇っている。(3-1:54) しかし、それを台無しにした主導者の一人が、おそらくは渡邊である。

第2号の冒頭は座談会「日本的思惟を語る——紀平正美博士を囲みて」である。紀平を中心に、田中忠雄、斎藤响、豊川昇が話している。紀平は中学校の最上級で哲学を志したと回想し、ヘーゲルは親鸞や論語で分かると思う。(3-2:4) その後、豊川が高山岩男の世界史の哲学を組上に載せ、絶対無では「参ずるといふ歴史の志気には出て来る筈がない」と批判する。(3-2:7-8) 田中が応じて、これは「中心の立ってゐない思想」、「時に阿る思想」であると断じ、斎藤は、彼らの世界は空間の世界にすぎないと決めつける。(3-2:8) それから本居宣長などへと話しは転じて行き、やがて再び豊川が、「京都哲学なんか実にかしな話ですよ」と言い始める。(3-2:14) これに対して紀平は、京都の哲学は「山の哲学」であり「普遍妥当な理論の構成」にすぎないのであって、哲学は金儲けや生産の仕事にも指導力を発揮する「市井の哲学」でなければならないと主張する。(3-2:14) 紀平の哲学は「市井の哲学」とのことである。

さらに、「分析の上から大東亜共栄圏はできやしませんよ」と断じる紀平に応じて、斎藤が、「彼らは要するに植民地の文化奴隷これに尽きるんだ」と罵倒する。(3-2:14) 斎藤は、世界的世界という言い方に「日本はない」とし、「みづから破滅を招くために外濠を埋めるやうなイデオロギーを築きつつある」と弾劾する。(3-2:14-15) そこで紀平は、「日本を確立しさへすれば、おのづから東亜共栄圏の中に入る」のであり、世界的などというのは「頭から問題ぢやありませんよ」と賛同し、これを田中が、

「まづ内を固めることですね」とまとめている。(3-2:15)

ここに初めて、京都学派への弾劾が誌面に本格的に登場する。そこに現れているのは内向きの姿勢であり、他者を否定する姿勢である。世界に対して心を閉ざし、他者を問題としない発言は、表面的な印象のみでの外れな罵倒を重ねる発言と、おそらくはつながっている。これらは、知的な探究によって他者を理解する努力への拒絶なのではないだろうか。

いずれにせよ、縮小する言論空間では競争相手を空間の外に押し出しやすい。しかも、その相手が日本にとって有害であると信じるならば、言論空間からの追放は日本の志士としての責務となり、悪書弾劾には大義名分が立つのである。ちなみに、田中と斎藤は佐藤通次とともに日本神話派と戦後に呼ばれたことがある。(栗田:476) また、斎藤は4月には日本出版会の理事・書籍部長に就任している。(帆刈:237)

今号の新著月評では法律の松波仁一郎、国文学の蓮田善明、現代文学の森本忠、美術の谷新一、婦人の村岡花子が新規である。おおむね落ち着いた雰囲気を書評である。しかし、森本は早速、「徒らに外国に模倣追従し、自国の文化、伝統には悉く反逆せんとする従来知識人が、それを不逞と知らず自ら善意と考へてゐる所に、明治以来の謬れる進歩思想の禍殃の深さがある」との警告を記している。(3-2:31) 小説家・評論家である森本は、この頃は朝日新聞社調査部に勤務しつつ、日本国語会や大日本言論報国会に関与している。(森本:140-142)

他方、文協勤務の山本新は、月評欄外の小文で京都学派の『中央公論』での座談会「総力戦の哲学」を好意的に紹介している。ただし山本は、総力戦の原理は国史の先人の志にまず求めるべきではないかとの注文も付けている。(3-2:33) この座談会の内容はまもなく、誌上で弾劾されることとなる。

編集後記で渡邊は、次号に「稀有の碩学」三井甲之先生の論考が載ると感激して語っている。(3-2:46) 渡邊は前年12月に石井良介と山梨県の三井家を訪ね、長時間の懇談の機会を得たとのことであり、まもなく東京堂から三井の『親鸞研究』が刊行されると予告している。(3-2:46) その

予告文には、「今や道元の自然因果応人生観だけでは間に合はぬ」とある。(3-2: 40 横広告頁) これを、道元を推す田中忠雄への嫌みと見るのは深読みに過ぎるであろうか。

第3号の表紙には、「ジャーナリズムと敷島の道 三井甲之」とある。編集後記で渡邊は、まさに原理日本社の言葉で『読書人』の使命を語っており、ここに引用する。

「思想とは言葉であり、事思ふは言思ふである。すなはち言論の枢機は言の葉の道即文章道に於て明らめ得るのである。文章の乱れ、調べの喪失の由来する昨今ジャーナリズムの淵根を思ふこと切なるものがある。文章道とはことだまのさきはひに天壤無窮の國體を仰ぎまつり、神州不滅を確心するといふことである。それはおのづから思想批判の偉力として発する。まことに「國體とは思想批判力である」と三井先生は切言せらるるのである。「読書人」の使命のただならざるをいよいよ痛感する次第である」。(3-3: 46)

三井は、自然科学に対する「精神科学の指導力」を説き、「言論思想戦」における「精神科学的研究と技術」の必要性を説く。(3-3: 1, 3) その際、「認識によって得らるる知識に対して体験によって得らるる情意力又は決心、それが精神」であり、その実内容は「感激」である、というのが三井の主張である。(3-3: 4) 三井によれば、12月8日の大詔の「体験とともに一億同胞は敷島の道に入った」のであり、(3-3: 9) ジャーナリズムで最近和歌が重要になったのは、それが「人のマゴコロを人の心に通はせ、この一つゴコロを神の心に通はしむる」のに不可欠であるためなのである。(3-3: 6)

言論は知識の伝達ではなく感動の共有のためにあり、その共有は天皇の体験への帰一となって心安らぐものとならねばならない。もしも心安らげないのであれば、それは心安らげない言論のためであり、そのような言論は弾劾し、沈黙させなければならない。これが三井の「論理」であり、蓑田胸喜たち原理日本社同人の「論理」である。心通わせることを最重要視する彼らにとって、心通わない他者は否定されるべき存在なのである。

(植村 2007 : 198)

三井の文章の途中には、なぜか二段組みの上段で田中忠雄の「学と皇朝の学——うひ山ぶみ解釈」が配置されている。田中は宣長の皇国本位の見識を讃え、和辻哲郎が『日本諸学』誌上の座談会で日本世界観という呼称に抵抗したと批判する。(3-3 : 6-7) 世界観に「日本を冠するのは、大和魂の志気」であり、「米英及び米英思想」と戦う日本では、「西洋ごころの普遍主義」を敵とすべきであると力説するのである。(3-3 : 6-7)

新著月評では哲学思想の磯部忠正、科学の湯浅明と伊藤浩、大衆読物の岩佐東一郎、経済の岩井主藏、語学の山口武、政治の梅木三郎が新規である。科学は緒方富雄、菅井準一ともに4人の担当であり、充実している。岩井は和魂と幸魂を論じており、経済の書評では全くない。不思議な書評である。梅木は松田福松の『米英研究』を著者の「実践求道」の書と賞賛している。(3-3 : 45) 松田は原理日本社の主要な同人である。

歴史の松田壽男は、高山の『世界史の哲学』への豊川の批判に賛同し、「皇国の学問は皇国民たる自覚の上に立つべき」とする。(3-3 : 15) 浅野晃は、保田與重郎の『日本語録』と影山正治の『志士詩文集』を国史の「不朽の書」と絶賛する。(3-3 : 17) 磯部は田中忠雄の『威儀の論理』を紹介して、道元「ただ一人に拠り、ただ一人に参究するところに」著者の批判の「深さ」、「清さ」、「広さ」があると評価する。(3-3 : 18) しかし磯部は、斎藤响の『日本的世界観』の多角的な研究にも惹かれるとし、まずは「大君の赤子たり親の子たる自覚」が重要なのであって、それさえあれば多くの師を仰いでもよいのではないかと田中に疑義を呈している。(3-3 : 19) 学習院教授の磯部は、1943年1月刊行の『神話哲学』の序で紀平を恩師、佐藤通次、斎藤响、田中忠雄を先輩と呼び、謝辞を記している。(磯部 : 序4)

第4号の冒頭は座談会「文章道を語る」である。参加者は田中忠雄、島田春雄、中谷孝雄、蓮田善明、房内幸成である。房内は、「言葉が力を失った」のは国民思想の混乱と表裏一体を成すものであり、アララギ派の歌には「ただ自意識だけで、道を、歴史を護るといふ気持がない」と批判

する。(3-4:2-3) さらに、西田幾多郎の哲学は「言葉で擬装してる哲学」であり、「詩精神を失ったその合理主義的な考へ方」が「日本の一般のインテリを風靡してる」ことに禍根があるとする。(3-4:3) 田中がこれに応じて、「なければならぬといふことを無茶苦茶に言ふのは感覚が病的だと思ふ」とし、「文章が駄目だといふことは、思想が駄目だといふことの歴然たる証拠」であると主張する。(3-4:4) 座談会はそれから、日本語の文法や西洋語との相違、漢字制限の誤りなどへと展開していく。

小説家の中谷は、この頃は牧野、浅野、次号から現代文学を担当する大鹿卓とともに『文藝日本』の同人である。蓮田は『文藝文化』の編集委員であり、影山正治によれば藤田徳太郎との関係が深い。(影山 1965: 142-143) 『文藝日本』と『文藝文化』は、影山が『民族派の文学運動』で日本浪漫派系の雑誌と位置付けており、保田與重郎をはじめとする『日本浪漫派』、『コギト』の人脈との関係が深かった。(影山 1965: 140-143) 島田はこの頃、朝日新聞社を退職して國學院大學教授であり、東條英機政権の国語政策に反対して森本忠と共闘していた。(森本: 141)

座談会の後に瀧口堯の『日本文章道』があり、「コトノハノミチの原理はマコトである」と説いている。(3-4:17) 瀧口は原理日本社の同人である。続いては、田中のうひ山ふみ解釈の連載である。田中は、『本居宣長全集』での村岡典嗣の解説は宣長に冷淡であり、「皇朝の学への志気を阻喪せしめる」と厳しく批判している。(3-4:19) 他方、短歌雑誌を論評する房内は、斎藤茂吉を「国語の兇敵」と呼び、「歌道の歴史と伝統と国語の尊厳を守る志から」アララギの「罪」を糺すとして、『原理日本』と『ひむがし』の歌風を特に「学ぶべきもの」としている。(3-4:21) 『ひむがし』は1941年11月創刊であり、影山を代表として三浦義一、浅野、保田が同人であった。(影山 1969: 189)

新著月評では歴史の宍戸儀一、美術の北川桃雄が新規である。歴史を再び担当した小林元は、崇外と排外を戒めて「皇民としての見識」を説き、南原繁の『国家と宗教』を留保付きながら「好著」と推奨している。(3-4:28-29) 森本は吉村貞司の『ニーベルンゲン伝説』を推奨し、

(3-4:30) 蓮田は佐藤春夫の『慵斎雜記』を絶賛する。(3-4:32) 大衆読物の岩佐東一郎は「愚書摘発」を説くものの、それは表題と内容が合致しない非良心的な出版物のことであった。(3-4:34)

科学の緒方富雄は、欧米の生理学・医学関係者の伝記の翻訳を紹介し、「他の長所を採ることにやぶさかであってはならぬ」と説き、「[「日本」で浄化して、どしどし日本にうつすべき]とする。(3-4:44) 美術や経済も、落ち着いた雰囲気の記事である。他方、児童読物の吉村貞司は、児童書での「米英残留文化」を批判し、読書が「心の米英の培養基」とならないよう警告している。(3-4:37)

4号の編集後記では、石井良介が「近頃の雑誌論文、単行本には未だ衣を透して鎧の見えるもののある」として、「学問の立場やイデオロギイによってなされただけであって何んら反國體意志なきものと言へど影響は同罪である」と人を脅かすような言い方をしている。(3-4:96) ここまでの脅迫的な言辞は編集後記で初めてのことであり、田中や房内の言動との共鳴が感じられてならない。

第5号の冒頭は、保田與重郎の「復古の本義」である。保田の登場は、『東京堂月報』第28巻第9号以来である。保田は、「近代の理想主義風西戎哲学」は人工的であり、宣長の描く道は自然であると説く。(3-5:1-2) また、「文化主義の觀念哲学」に基づいて論じられる「道義」は道ではないとする。(3-5:2) 保田は、復古とは「今の 天皇命の大御稜威の顕揚に奉仕することの一点にあり」、日本には「この古い不動の道を顕揚すること」以外に何も無いとするのである。(3-5:4)

理想を偽造せず時務に流されず、いわば合理化する思考方法に陥ることなく道を顕揚することを、保田は日本人に求める。保田によれば、「國民総力の結集が、戦争の勝利の決定者となる」という「戦争の実相に痛感し、真にこの戦争を戦ひうるところの思想を確立」することが求められているのであり、それこそが「思想戦の眼目」なのである。(3-5:6-7) 「自由主義系の思想家たちは、所謂国内思想戦をいふことを以て、戦時下の不利だと強弁してゐるが、それは彼らの戦争観の陳腐さに由来する考へ方に発す

るものである」と切り捨てて、保田はその蒙をひらくと主張するのである。(3-5:7)

この保田の主張は、『東京堂月報』での主張と同様である。それは他者を想定せず、日本国内に他者の存在を許さず、ひたすらに内に向かう思考方法である。理想を提示もせず時務の判断もしないのであれば、政治的な権力闘争から身を引いて、人心の向上に文芸で尽力すべきであろう。橋川文三は、保田を「徹底したイロニカルな弱者」と呼び、その発言を「敵を認めようとしないう侵略主義」と評した。(橋川:68-69) 他者を想定しなければ、自己が敗北することはない。原理日本社が勝利を一方的に僭称するのに対して、保田は、敗北を一方的に否定するために他者を否定すると言えらるのではないだろうか。

保田に続く浅野晃の『維新史覚書』は、連載第1回である。維新は明治天皇の「大御業」であり、それは「歴代の不断の御聖志」の成就である、というのが浅野の立場である。(3-5:8) その後の田中忠雄の連載「うひ山ふみ解釈」では、方法や訓詁に執着する学者の「戯論」が斥けられて、学道への精進が説かれている。(3-5:10-11)

雑誌月評は原理日本社の後藤積である。森本は、後藤を大日本言論報国会に紹介して事務局に「入れてもらった」と回想している。(森本:137) 蓑田と比べれば、迫力のない批判である。新著月評では、哲学思想の松本彦次郎、現代文学の大鹿卓、大衆読物の岡不可止、国文学の本位田重美、演劇の櫻間道雄、科学の鈴木好一が新規である。

松本は、盟友三井甲之の近刊『親鸞研究』を絶賛する。松本は、親鸞の宗教は「将に日本生命そのもの」とであるとし、三井はすでに大正期の研究で今日を「預言」しており、「追従的理論的」な歴史哲学とは次元が異なるとする。(3-5:17) 松本はまた、九州帝国大学教授で社会学者の蔵内数太が、『現代』誌上で原理日本社の木村卯之との親交を回顧したと紹介し、蔵内の新著を蔵内と親交があった佐藤通次の新著と併せて推奨している。(3-5:18)

大鹿は影山正治と保田與重郎を絶賛し、「文学の維新」の必要性を力説

する。(3-5:19) さらに、吉井勇と前川佐美雄の歌集を推奨する。(3-5:19) 浅野晃や牧野吉晴とともに、彼らは皆、親しい文学の仲間である。児童読物の吉村貞司は『文藝日本』の同人であり、(吉村:192) 国文学の本位田重美は、蓮田善明たちの『文藝文化』に寄稿している。(3-5:24)

ただし、1985年刊行の書籍で吉村は、1942年に『文藝日本』同人となったものの、「本居宣長批判を発表したため、「国賊」よばわりされて追放された」としている。(吉村:192) しかし、1945年3月発行の『文藝日本』第7巻第3号の編集余録下段には吉村の名前が挙がっている。(文藝日本7-3:48) 南方徴用作家としてフィリピンに派遣された尾崎士郎が1942年末に帰国し、その後、尾崎を中心に編集方針が改まった可能性を都築久義が指摘しており、(都築:241-242) 吉村は尾崎不在時に『文藝日本』と一時疎遠になったのかもしれない。

いずれにせよ、同号には尾崎士郎を筆頭とする40人の名前があり、おそらくは同人の一覧であると考えられる。ちなみに、この号の次が最終号であり、いずれも、文藝春秋を退社した下島漣の編集である。この一覧のなかでの『読書人』関係者を掲載順に以下に挙げておく。大鹿卓、浅野晃、佐藤通次、藤田徳太郎、中谷孝雄、保田興重郎、岡不可止、房内幸成、吉村貞司、島田春雄、森本忠、田中忠雄、下島漣、牧野吉晴の14名である。(文藝日本7-3:48) この陣容を眺めると、『読書人』は『文藝日本』関係者の同人雑誌化していった、もしくは、広い意味での日本浪漫派系の雑誌になっていった、と言えるのかもしれない。

科学、演劇は落ち着いた雰囲気である。歴史の小林元は、歴史哲学を論じる樺俊雄、宮島肇の近刊について、それぞれの学問的努力を評価しつつも「皇国日本の史態に基づく歴史哲学」を語ってほしいと注文を付けている。(3-5:33) 岩井主藏は、生みの哲学をひたすら紹介して通常の経済書には言及していない。(3-5:30-32) やはり不思議な書評である。

編集後記では石井が、「正体のわからぬ化物は危険であり悪質であるがこの化の皮をはがすのが編集者の責任である」としている。(3-5:76) 他方、渡邊は、「今日ほど、志ある書評の要を痛感せしめらるるはない」と

して、「志に貫通する書評欄の樹立へ孜孜として倦むを知らぬ」と決意を述べている。編集部として、国内思想戦を推進する意欲はきわめて高い。

第6号の冒頭は、田中忠雄の連載「うひ山ふみ解釈」の「宣長と幕府」である。田中は、蓮田の宣長論を高く評価する一方、「全知全能の抽象神、さらにこの抽象神を抽象化せる「絶対者」、またこの絶対者を論ふ絶対者の学、これらのものよりきたれる感覚」が「高き所より多事を見渡す学問」の跳梁をもたらすと非難している。(3-6:4-5)「学における志の相承相伝」を期することのない感覚が、学を誤る根本であるとするのである。(3-6:5)

田中の次は浅野晃の連載、その次は房内幸成の短歌評論である。房内は土屋文明の歌を酷評し、「すべて人生の真実さへ表現すれば文学になるといふのは西戎の蛮風であって^{くにぶり}国風ではない」とする。(3-6:8)房内が絶賛するのは影山の歌である。その後、原理日本社の後藤積による雑誌月評、慶應義塾大学教授の川合貞一による近刊自著紹介がある。川合は東京堂から1943年6月に、『恩の思想』を刊行している。

川合は長年にわたって三井、蓑田ときわめて親しい関係にあった。5月刊行の『原理日本』第19巻第5号には川合による恩の思想の解説が掲載され、6月刊行の第6号には「ヴント先生の思ひ出」が掲載されている。ヴィルヘルム・ヴントは三井、蓑田が絶賛する学者であり、川合の留学時の恩師である。7月刊行の第7号には三井による『恩の思想』の紹介文が掲載され、原理日本社として川合への敬意は深い。

なお、第6号の編集消息には蓑田の健康が優れず、阿部隆一が編集を担当したとある。(原理日本:620)第2号の編集消息では蓑田が「昨秋来健康を失し執筆も怠り」と記しており、(原理日本:606)5号までは編集に当たっているものの、第7号から終刊の第20巻第1号まで、編集は齋藤隆而が担当することとなった。『原理日本』は1944年1月刊行の通巻第185号をもって途絶するのである。原動力である蓑田が弱体化することは、原理日本社の迫力と影響力を弱めざるをえない深刻な事態である。

新著月評では哲学を豊川昇が再担当し、歴史の森末義彰、科学の野村健

一と福井英一郎が新規である。豊川は佐藤通次の『学問の厳肅性』を絶賛し、著者の求める「護国の立場」は「紀平博士の如き憂国の学者」によって守られてきたとする。(3-6:17) なお豊川は、佐藤の国民精神文化研究所所員着任を報じている。豊川によれば、同研究所は「ひとの目して学界の尊攘堂とする所、所員はすなはち学界の志士」とのことである。(3-6:17)

現代文学の大鹿卓は西洋輸入の自由詩の意義を否定し、『文藝日本』での大木惇夫の同様の主張に賛同する。(3-6:21) 他方、児童読物の吉村貞司は、沖野岩三郎の『平田篤胤』伝には偉人の精神の把握がないと酷評する。(3-6:23) 岩井主藏は、むすび論を究めることで作田壮一や大熊信行の経済学を理解しようとしているとする。(3-6:32) 経済の書評欄として不思議な航跡に対する釈明であろう。

今号の編集後記は「編集室」と題している。渡邊は「確たる皇国の志気の貫かれておらぬ書評は読書人自らこれを厳に律せねばならぬ」とし、「来月号は全誌をあげて哲学書評号として思想言論界に貫く本誌の「やまとだまし」を発露せんと敬虔に祈念するものである」と記している。(3-6:64) 次号は、西田幾多郎を中心とする京都学派の人びとへの異様な罵倒に満ちた特集号である。

以上のように、1943年前半の『読書人』は、前年11月号掲載の座談会から悪書弾劾へと重点を移していくものであった。誌面の雰囲気弾劾風になっているのは、とりわけ田中忠雄と房内幸成である。田中は全号に執筆し、1、2、4、6号の企画を主導している可能性が高い。3号の三井甲之、5号の保田與重郎は別格の依頼であろう。なお森本忠は、哲学書批判号への執筆依頼は田中から受けたと証言し、東京堂の「顧問か何かしてゐたらしい」と回想している。(森本:168)

原理日本社関係では、2号以外で複数の執筆者がある。しかし肝心の蓑田は書いておらず、同人は誌面で強烈な存在感を示せていない。なお、精神科学研究所は2月に東條英機政権の弾圧を受け、東京憲兵隊による一斉検挙と解散要求を経て10月に解散を余儀なくされている。(小田村:

212-216) 原理日本社は別団体であるものの、人脈的なつながりはあり、蓑田の苦悩は深かったことであろう。(植村 2007: 264)

豊川昇は1、2、6号に執筆し、紀平を讃えつつ京都学派を目の敵にしている。房内は、4、6号の執筆のみならず2、5号には歌を出している。一般的に文藝日本系が急速に存在感を増しており、田中と房内を除いても、前半で2、3人、後半で5人ほどの執筆がある。その誌面での存在感は大きく、互いの著書を絶賛して推奨に努めている。

前年までの『読書人』は、経済、法律、科学の欄を筆頭にはほぼ通常の書評誌であった。もとより出版新体制下の出版物に戦争への反対はなく、書評にも現実に対する批判はなかった。しかし、客観的に内容を整理し、その特徴を紹介していく姿勢は、通常の書評の態度であった。ところがここに至って、書評は志士の志気を発する場所となり、述志の文学的な雰囲気濃厚になっていく。編集部の意欲のどこまでが思想的な理由であり、どこまでが経営的な事情であるかは不明ではあるものの、悪名高い次号の特集は、『読書人』の雑誌としての印象を後世に決定的なものとした。次章ではその詳細を紹介したい。

- * 本研究は、JSPS 科研費 JP19K01459 の助成を受けたものである。
- * 本研究は、令和2年度京都産業大学学外研究員制度を活用したものである。自由研究員の機会を頂戴したことに記して感謝の意を表したい。
- * 本文中の註記に際し、雑誌の引用は1巻2号3~4頁であれば1-2:3-4と表記し、適宜雑誌名を省略している。「編輯」「特輯」は「編集」「特集」と表記し、漢数字はローマ数字、旧字体は新字体に適宜改めている。
- * 本稿(1)の参考文献では、著者の不注意により佐藤卓己『言論統制』が脱落していた。記してお詫びしたい。

参考文献

赤澤史朗『徳富蘇峰と大日本言論報国会』山川出版社、2017年。

- 浅野晃・影山正治『転向——日本への回帰』暁書房、1983年。
- 磯部忠正『神話哲学』朝倉書店、1943年。
- 井上義和『日本主義と東京大学——昭和期学生思想運動の系譜』柏書房、2008年。
- 植村和秀「近代日本の反知性主義——信仰・運動・屈折」『政治思想研究』第20号（2020年5月）。（植村2020と略称）
- 植村和秀『「日本」への問いをめぐる闘争——京都学派と原理日本社』柏書房、2007年。（植村2007と略称）
- 魚住昭『出版と権力——講談社と野間家の110年』講談社、2021年。
- 大草実・萱原宏一・下島漣・下村亮一・高森英次・松下英麿『昭和動乱期を語る——一流雑誌記者の証言』経済往来社、1982年。
- 大澤広嗣『戦時下の日本仏教と南方地域』法蔵館、2015年。
- 小田村寅二郎『昭和史に刻むわれらが道統』日本教文社、1978年。
- 平塚益徳編『小沼洋夫遺稿集』小沼洋夫遺稿集刊行委員会、1968年。（小沼と略称）
- 影山正治『民族派の文学運動』大東塾出版部、1965年。（影山1965と略称）
- 影山正治『日本民族派の運動——民族派文学の系譜』光風社書店、1969年。（影山1969と略称）
- 萱原宏一『私の大衆文壇史』青蛙房、1972年。
- 木下宏一『国文学とナショナリズム——沼波瓊音、三井甲之、久松潜一、政治的文学者たちの学問と思想』三元社、2018年。
- 栗田英彦「日本主義の主体性と抗争——原理日本社・京都学派・日本浪漫派」石井公成監修、近藤俊太郎・名和達宣編『近代の仏教思想と日本主義』法蔵館、2020年。
- 「原理日本」編集消息『蓑田胸喜全集』第7巻、柏書房、2004年。
- 社史編纂委員会編『講談社の歩んだ50年（昭和編）』講談社、1959年。（講談社と略記）
- 昆野伸幸『増補改訂 近代日本の国体論——〈皇国史観〉再考』べりかん社、2019年。
- 佐藤卓己『言論統制——情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』中公新書、2004年。
- 荘司徳太郎・清水文吉編著『資料年表 日配時代史——現代出版流通の原点』出版ニュース社、1980年。
- 「田中四郎氏を偲ぶ」刊行会（江草四郎代表）『田中四郎氏を偲ぶ——出版文協時代とその前後』有斐閣、1974年。（田中と略称）
- 祝賀会準備局編『口唇皮上に光を放つ “執筆活動半世紀” 「田中忠雄三分間禪話」完結記念祝賀会誌』名著普及会、1987年。（田中忠雄と略称）

- 都築久義「『文藝日本』について」『淑徳国文』第26号（1984年12月）。
- 岩出貞夫編『東京堂の八十五年』東京堂、1976年。（東京堂と略記）
- 協同出版社編集部『日本出版年鑑（昭和18年度版）』協同出版社、1943年。（年鑑と略記）なお、引用は奥平康弘監修『言論統制文献資料集成』第12巻、日本図書センター、1992年による。
- 橋川文三『日本浪漫派批判序説』講談社文芸文庫、1998年。
- 房内幸成『天朝の御学風』東京堂、1944年。
- 『文藝日本』、文藝日本協会。
- 帆刈芳之助『文協改革史』帆刈出版研究所、1943年。
- 松本達治編集発行『松本潤一郎追憶』1953年。
- 森本忠『僕の詩と真実』日本談義社、1968年。
- 山本慶治『感謝と思い出 創業30年を回顧して』培風館、1954年。
- 吉村貞司『旅の余白』吉村貞司先生喜寿記念刊行会、1985年。